多摩区と専大の魅力発信

メディアプロデュースプログラム・映像作品発表

最優秀賞　平形さん「わたしの好きなまち」

ネットワーク情報学部の「メディアプロデュースプログラム」応用演習成果発表会と優秀作品表彰式が1月21日、サテライトキャンパスで催され、2年次生41人が作品を披露、優秀作が表彰された。

同授業では、映像制作の過程を学び、ニーズや目的に即した企画力、表現手法などの創造性、グループワーク、コミュニケーション能力の習得を目指す。

テーマは「川崎市多摩区と専修大学の魅力」。個人制作の映像CM（30秒）41作と、かわさき市民活動センターの登録団体をPRする映像作品（グループ制作・3分以内）9作が並んだ。

表彰式には、審査員を務めた多摩区の小松宏吉副区長をはじめ、担当教員の福冨忠和教授、藤原正仁准教授、藤咲淳一非常勤講師が出席した。

川崎市多摩区長最優秀賞は「わたしの好きなまち」の平形怜菜さん。「多摩区の魅力である水と緑を軸にした豊かな自然を、ストーリー性を盛り込んで描いた」と話す。カメラのシャッター音を効果的に使ってリズミカルに表現、多摩区から絶大な評価を得た。

専修大学広報課優秀賞と入学センター特別奨励賞をダブル受賞したのは「誰かが支えてくれる。だから学べる。」の関口拓也さん。「専大の自慢はたくさんある。食堂のおばちゃんや警備員さんにも登場してもらい、目立たない仕事をしているがなくてはならない人たちに感謝の気持ちを込めたかった」と関口さん。

教員特別奨励賞は技術の高さ、個性的な表現手法を基準に教員が選ぶ。

「映像作りを通して専大や生田の街（多摩区）を知るいい機会になっている。ニーズに合わせて表現する的確さも大事」（福冨教授）、「豊かな着想をもつ作品が多かった。基本を忘れずに、のびのびと失敗を恐れずに取り組んでほしい」（藤咲非常勤講師）など注文やエールが送られた。

そのほかの優秀作品は以下のとおり（敬称略）。

▽川崎市多摩区長優秀賞＝増井洸貴「あなたの休日に緑を」▽専修大学入学センター優秀賞＝田中美帆「楽しみ方はあなた次第」▽同特別奨励賞＝佐藤駿「百円あったら、専大いこう。」／橋本祐希「専修大学でみつけよう」／大和谷瑞希「ここだから頑張れる」▽専修大学教員特別奨励賞＝松尾泰樹「仲直り」／深澤和也「『僕も』好きですかわさき愛のまち」／縄田悠香「はなたま―生田緑地と多摩川編―」（専修大学広報課と入学センター2部門の最優秀賞は該当者なし）

市民団体PR作品は、1月30日に「かわさき市民活動センター」でも紹介された。2月5日には、作品をテーマにNPO団体と学生との交流会が開かれた。

▶ 表彰式後、学生・審査員ら全員で

人間科学部心理学科　初の実験動物慰霊祭

人間科学部心理学科では今年度初めて、学部生の授業に動物実験を取り入れた。実験に供されたラットの慰霊祭が1月20日、生田キャンパスで行われ、学生や講師陣がラットへの感謝と哀悼の意を表わした。

同学科では2年次生の必修授業「心理学基礎実験2」で18匹のラットを用いた。学生は動物実験室で学習行動実験に参加し、動物実験の研究倫理についても学んだ。ラットは実験後、国の定める生命倫理指針に従って安楽死させられた。

慰霊祭では出席者全員で黙とうをささげた後、授業を担当している山上精次学部長が「心理学が対象としているのは生物。生物にとって唯一無二のこの命を、ラットは実験で君たちにささげてくれた。感謝と哀悼の意を表したいと思います。心理学は生物の命に支えられているということを理解してほしい」と述べた。そして学生73人と講師らは教室の一角に設けられた祭壇に向かい手を合わせた。

山上教授によると、専門ゼミナールに入る前の一般の授業でラットを用いる大学は全国でも少ないという。「論文を読んだだけでは分からない重要なことを、実験を通じて学生たちには学んでほしい」と話している。

▶ 初めて行われたラットの慰霊祭では、学生たちが手を合わせ哀悼の意を表した

海外NGO活動写真展　国際経済学科

海外でNGO活動をした学生が撮影した写真展が1月20日から27日まで、生田キャンパス9号館アトリウムで開かれた。

写真は経済学部国際経済学科の「NGO論」（狐崎知己教授）を受講し、メキシコ、タンザニア、インド、バングラデシュ、スリランカ、フィリピン、ベトナム、タイでのスタディーツアーに参加した学生19人の10作品。現地の様子や人々の表情をとらえた力作が並んだ。

フィリピンで孤児院を訪ねた荒川晴菜さん（3年次）はあどけない男の子が手をかざす姿をカメラに収めた。「孤児院で一番年少の男の子の手が意外と大きくたくましかった。思わずシャッターを押した。次はほかの国に行ってみたい」。タンザニアのコーヒー農園の暮らしを体験した今野隆司さん（同）は「コーヒー豆の生産過程の大変な状況を実感した」という。

同科目は夏期休暇中に本学の補助金を得て、さまざまなNGOのスタディーツアーに参加。途上国の人々の立場に立った効果的な国際協力の在り方を考える特徴ある授業だ。

▲ 力作を展示した学生たち。中央が狐崎教授

企業研修報告会　ネット情報

ネットワーク情報学部の3年次生24人が夏期休暇中に行った企業研修（インターンシップ、担当・小林隆教授）の報告会が10月20日、生田キャンパスで開かれ、代表して4人（山田紗弥さん、小川亜咲さん、岩田達夢さん、吉野なつみさん）が体験発表を行った。

企業研修は、社会で仕事を経験することにより仕事の意義を学び、進路、職業選択、キャリア形成を考える契機にもなる。今回の受け入れ先はソフトウェア開発、ウェブデザイン、デジタルコンテンツ販売、アニメ制作、経営コンサルティングなど20社・団体。当日は受け入れ先の担当者や同学部1、2年次生ら合わせて約500人が参加、発表を聴いた。

ウェブサイト制作の㈱アイ・エム・ジェイで10日間、研修した吉野さんは「異なった視点を持つ人と接したことで、今まで経験したことのない新鮮な気持ちを持った」と印象を話した。就職先を迷っていたが、「研修を経て進路をイメージすることができるようになった」と言う。同社に昨年4月就職した先輩の赤石あずささん（平27ネット情報）も駆けつけ、吉野さんの発表を聴いた。

同学部は、2003年度から企業研修を開始、現在までに250人以上が受講している。

▲ 吉野なつみさん

▲ 山田紗弥さん

21人が報告　経済・学外特別研修体験発表会

経済学部の学外特別研修（インターンシップ、担当・宮嵜晃臣教授）発表会が12月12日、生田キャンパスで行われた。夏期休暇中に企業や各種団体で体験した実務について学生21人が報告した。

経済学部のインターンシップは2001年にスタート。単位認定を伴う専門科目として、前期の事前学習を経て、夏期休暇中の1～2週間、学外特別研修を行い、後期にプレゼンテーションの準備と発表を行う。

今年度は20カ所で21人が研修を受けた。発表会ではその内容や成果をパワーポイントで紹介した。

▶ 研修について報告する上遠野さん

このうち山崎製パンで研修を受けた上遠野凱さん（3年次）は製造から配達、営業まで全工程を体験。「モノをつくり、売るにはさまざまなアンテナを張る必要がある」と学んだ。同社人事本部の成田高大次長は「チームワークやコミュニケーション、情報収集、分析など、短期間でさまざまな気付きを得て、視野が広がったのではないか」と評価した。

「故郷のよさを実感したい」と富山県黒部市役所で研修した米山夏季さん（2年次）は、牧場やこども自然体験村で10日間汗を流した。「公務員の仕事は窓口業務だけではない、体力もいると知った。研修を通じ、積極的に行動すること、仕事を楽しむこと、想像力を持って準備することの大切さを実感した」と振り返った。